川村学園女子大学研究紀要　第18巻　第2号　95頁―107頁　2007年

幼稚園教育実習の教授内容に関する一考察
――学生が把握した幼稚園と保育所の違いからその課題を探る――

栗　原　泰　子*・野　尻　裕　子**

One Consideration about Professor Contents of Kindergarten Student Teaching
It is Examined the Problem by a Kindergarten and a Difference of a Day Nursery that a Student Grasped

Yasuko KURIHARA, Yuko NOJIRI

要　旨

平成13年度より，本学科において保育士養成が開始された。現在，保育士に関する実習（3回）は，3年次までに実施され，その後幼稚園教育実習（2回）が行われている。

筆者等はその幼稚園教育実習演習及び幼稚園教育実習の担当者である。保育士養成が開始されてから，教育実習における学生の学びに変化が表れていることに気づいた。

そこで本研究においては，保育現場をすでに実習という形で経験している学生に対して，幼稚園教育実習演習における教授内容を再考するために，保育所，幼稚園の5回の実習を修了した学生にその両者の実習について振り返ってその共通点と相違点の両面からどのようなとらえ方をしているのかを調査した。その結果から，幼稚園教育実習における課題について検討を行った。

キーワード：幼稚園教育実習，教授内容，幼稚園，保育所

*教授　幼児教育学
**助教授　幼児教育学

1. はじめに

本学は，1953年昭和28年に短期大学に保育科を創設して以来，幼稚園教員の養成を行ってきた。1991（平成3）年度からは，短期大学は4年制の大学へと発展的解消となり，短大の保育科は廃止された。幼児教育学科では，開設当初から幼稚園教員の養成を行ってきた。2001（平成13）年度より，保育士の養成を開始して，現在はその6年目となっている。幼稚園教員の免許状及び保育士の資格の取得は卒業要件とはなってはいないが，学生のほとんどはその取得を目指している。本年度10月より実施されている「認定こども園」など，多様な保育方法が広がりつつある今日，幼稚園教諭と保育士の資格の両方の取得を目指す学生は今後も多いものと思われる。

幼稚園と保育所はその目的に保育を行うことが謳われ，3歳以上の保育内容や保育所は幼稚園教育要領に準拠して行うということが申し合わされ，記述されている内容は異なってはいるが，これが両者の共通点であると捉えることができる。保育士の養成がスタートするということで，本学においても保育士の養成に新たなカリキュラムを設定したが，その中で保育に関する内容は，両者に共通した部分として立てられている。

これらの免許，資格の取得を希望する学生は，1，2年次に保育士関連の実習を行い，3，4年次に幼稚園教育実習を2回にわたって行っている。幼稚園教諭の免許と保育士資格を取得する場合には，学生は5回の実習を経験することが必要となってくる。

筆者らは4年制大学になってから，幼稚園教育実習及び教育実習演習を担当してきているが，保育実習が始まってからの学生の教育実習への取り組み方に変化が表れてきていることに気が付いた。端的な変化は，実習成績の低下となって表れた。これまで教育実習に

おいて不合格あるいはC評価（AからDまでの4段階評価）をされる学生が出現し，そして増加しているということが現状として表れてきた。しかもこの成績の低下は長いつきあいのある実習協力園からの成績にも表れてきている。実習馴れしてしまっているのか，幼稚園と保育所を同様のものとして位置づけてしまっているのか，そのことについて調べてみようと考えた。

2. 研究目的

本研究においては，保育所実習実施後に実施される幼稚園教育実習の教授内容を再考すために，幼稚園，保育所の5回の実習を修了した学生にその両者の実習について振り返って記述を

求めた内容から，幼稚園教育実習における課題について検討することを目的とする。

3. 研究方法

3年次2月の幼稚園教育実習後に学生にレポートを作成させ，その中に幼稚園と保育園の実習について，共通している点，違っている点の2点を視点として自由記述させた。

有効回答数：89

調査年月日：2006年2月27日

分析にあたっては，学生の記述内容からその記述内容によってキーワードを抽出し，そのキーワードによって集計を行った。

4. 幼稚園と保育所について

検討を行うにあたって，幼稚園と保育園の相違点について概観しておく。

幼稚園は学校教育法第1条において，学校の1つとして位置づけられ，したがって保育を担当する者は，幼稚園教諭という名称が与えられている。幼稚園教育の目的は学校教育法の中で規定されており，その所管は文部科学省となっている。入園できる幼児に関しては「満3歳から小学校就学の始期に達するまでの幼児」とされており，4月段階での学年によって学級編制が行われる。保育時間は「1日4時間を標準」としており，年間39週の教育を最低行わなければならないとされている。また1クラスは幼児35人以下で編成されなければならないということも規定されている。幼稚園の保育内容に関しては学校教育法の規定に従い，文部科学省が別途定めた「幼稚園教育要領」によるものとされている。幼稚園は学校の1つであるので，この「幼稚園教育要領」は法的拘束力をもつものである。

一方，保育所は児童福祉法を根拠法令として，「保育所は，日日保護者の委託を受けて保育に欠けるその乳児又は幼児を保育することを目的とする施設とする」という規定がなされている。所管は厚生労働省であり，そこで保育をされる対象は1歳未満の乳児から小学校の就学の始期に達するまでとされている。保育士の配置は，0歳児では乳児3名につき保育士1名，1・2歳児では乳児6名につき保育士1名，3歳児では幼児20名につき保育士1名，4・5歳児では幼児30名につき保育士1名ということになっている。また保育時間は1日8時間を原則としているが，現在は11時間～13時間保育を行う保育所が，親の保育ニーズに応えるかたちで増えてきている。その他多様な保育ニーズとして，延長保育や，病児保育，休日保育，夜間保

育なども実施している。保育内容の基準としては「保育所保育指針」があるが，これは「幼稚園教育要領」とは異なり法的な拘束力はない。

具体的な保育内容についてみてみると，幼稚園では「幼稚園教育要領」に示されているとおり，幼児の遊びを5つの領域から把握することとしている。5つの領域とは，健康，人間関係，環境，言語，表現である。これらを保育者が幼児を理解する視点として用いることとなる。「保育所保育指針」では，6か月未満児から6歳児まで乳幼児の生活年齢に即した発達段階区分による保育内容が提示されている。保育所は乳幼児を保育するという観点から，養護と教育の2つの側面をもつものであり，その内容もその2つの側面に対応している。ただし3歳以上の保育に関しては，「幼稚園教育要領」に準拠することとなっているが，「保育所保育指針」では，各発達段階区分による記述となっているため，3歳以上の保育内容には5つの領域が設定されているが，その記述内容は「幼稚園教育要領」とは異なるものとなっている。

現実的にみてみると，幼稚園と保育所は「認定こども園」としてそれぞれが新たな保育施設として誕生していくということで両方の機能を併有するという方向性が見いだせるが，それぞれ独立して，連携が十分に図られているとは言い難い状況である。

5. 結果及び考察

(1) 共通点

学生の記述内容から抽出したキーワードを「保育者」「子ども」「園全体」「その他」の4つに分類し，それぞれについて集計を行った（表1)。種受けにあたっては，学生の総数89名を全体としたパーセンテージと，総回答数134を全体としたパーセンテージを算出した。これは，各記述からキーワードを抽出する際に，同一のキーワードの記述がみられても1つとして算出したからである。したがって，例えば「子どもの援助」について解答している学生は，重複しておらず，学生全体に占める割合が算出されているからである。逆に異なるキーワードにおいては，同一の学生が回答していることがあり，そのため，回答数全体に占める割合も示した。

学生の関心は保育者に向かっており，回答数全体の59.0%の学生が回答をしている。実習ということで，自分が保育者になることを想定しての学びの姿勢から，このように保育者へと学生の関心が向かっていると思われる。

具体的な援助の内容を見てみると，保育者への子ども援助が全体の30.3%，子ども一人一人に対する対応も25.8%，ことばがけが16.9%，安全面への配慮について8.9%という結果となっている。ここでも学生は，具体的な保育者の援助の方法についてとらえており，その多くは子

表１　学生がとらえた幼稚園と保育所の共通点

項目	キーワード		N＝89	N＝134
		N	%	%
保育者	子どもへの援助	27	30.3	20.1
	一人一人への対応	23	25.8	17.2
	ことばがけ	15	16.9	11.2
	安全への配慮	8	8.9	6.0
	保育者同士の連携	6	6.7	4.5
	小　計	79	88.8	59.0
子ども	自由遊び	22	24.7	16.4
	子どもの成長・発達	7	7.9	5.2
	基本的な生活習慣	4	4.5	3.0
	あいさつ	4	4.5	3.0
	小　計	37	41.6	27.6
園全体	環境構成	4	4.5	3.0
	玩具	2	2.2	1.5
	行事	1	1.1	0.7
	小　計	7	7.9	5.2
その他	信頼関係	3	3.4	2.2
	家庭との連携	6	6.7	4.5
	地域との連携	2	2.2	1.5
	小　計	11	12.4	8.2
	合　計	134	150.6	100.0

どもとの関係性の中での保育の援助という内容となっている。

子どもについては，総回答数の27.6％となっている。その中で一番多かったのは「自由遊び」で，全体の24.7％の学生が記述している。ついで子どもの成長・発達が7.9％，となっている。実習において学生は，子どもたちと個々に対応することが多い，自由遊びの時間に子どもたちの観察を行って，その理解を深めている。また，自由遊びの内容についてや，子どもを取り巻く環境に関しては，同様であったという学生が全体の４分の１いた。

子どもに関しては，実習生が子どもと１対１で対応することの多い自由遊びの時間において，子どもに関する理解をしていることが伺えるが，遊びによる子どもの把握や，クラス全体の子どもの把握などが深まれば，３歳児以上のクラスにおける活動などにおいても共通点を見出しうるものである。

(2) 相違点

相違点に関しても（1）の共通点と同様に集計を行った（表2)。共通点と比べるとその記述の量は非常に多く，3.5倍ものキーワードが抽出された。このことから，保育所と幼稚園という2つの異なる施設で実習を経験することによって，その違いの方に学生の意識が向かっていることがわかる。

相違点に関しては，保育内容，保育者，子ども，園全体，その他の5つに分類した。

一番多かったのは，共通点であげられていたような保育者の援助などではなく，具体的な保育内容にかかわることであった。幼稚園ではピアノが多用されているというように，保育内容を子どもに提示する方法として，保育所とは大きな違いがみられるとしている。これが全体の41.6%，約半数近くの学生あげていたことである。また，幼稚園では，朝の会，昼，帰りの会では必ず保育者がピアノをひき，子どもが歌を歌ったり，あるいは片づけの合図にもピアノを使用したりということがあったようである。幼稚園教育実習以前に経験した保育所実習ではピアノはあまり使用されていなかった点から，大きなインパクトとして学生の記憶に残ったものと考えられる。幼稚園の教師になるためにはピアノは不可欠なものであり，自分の技術的なレベルから幼稚園教師をあきらめるという学生もみられる。

また，保育所は子どもたちが生活をしているばであり，幼稚園はやはり教育の場であるという印象を持った学生が全体の36.0%みられた。そして，保育所は子どもたちがのんびり過ごしているが，幼稚園では，その活動にメリハリがあったとするものが全体の29.2%であった。保育内容で特徴的なのは，幼稚園では，製作や文字や数の指導が行われていたとする学生が29.2%あったことである。このことから，前述した幼稚園は教育，というような印象につながったものと考えられる。

幼稚園教育実習は3年次，4年次ともにほとんどが私立幼稚園で実習をしたということも関係すると思うが，制服や帽子，体操服やカバン，スモッグなどがある，あるいは園バスで送迎しているなど，園の経営方針による違いがみられ，これは3割前後の学生の記述が見られた。また，音楽や体育関連の活動では講師を呼んでいる，あるいは課外でおけいこごとに場所を提供しているということも22%の幼稚園で行われていた。

この違いについては，保育所は生活の場であり，幼稚園は教育（学び）の場であるというとらえ方をしていた学生が36%いることから，基本的な違いについての把握が行われていたことがわかる。

私立幼稚園ということであるため，先ほどのようなおけいこごとのようなものをほとんどの幼稚園で講師を雇って行っていたようである。具体的には新体操，サッカー，スイミング，英

表2　学生がとらえた幼稚園と保育所の相違点

項目	キーワード			N＝89	N＝467
	保育所	幼稚園	N	%	%
保育内容	生活のんびり	ピアノの使用	37	41.6	7.9
		教　育	32	36.0	6.9
		メリハリ	26	29.2	5.6
		製作・文字・数字当	26	29.2	5.6
		制服・帽子など	23	25.8	4.9
		主活動	21	23.6	4.5
		体育・音楽の講師	20	22.4	4.3
		番活動	6	6.7	1.3
		飼育動物	3	3.4	0.6
		小　計	194	218.0	41.5
保育者	保育者の援助		14	15.7	3.0
	掃　除		12	13.5	2.6
	教材準備の仕方		9	10.1	1.9
	保育者のイメージ		7	7.9	1.5
	保育者の服装		2	2.2	0.4
	ミーティングの仕方		2	2.2	0.4
	小　計		46	51.7	27.6
子ども	子どもの成長・発達		17	19.1	3.6
	基本的な生活習慣		7	7.9	1.5
	遊びの種類		3	3.4	6.4
	小　計		27	41.6	5.8
園全体	保育時間		25	28.1	5.4
	送迎の仕方		18	20.2	3.9
	午睡・おやつ		16	18.0	3.4
	昼　食		13	14.6	2.8
	行　事		11	12.4	2.4
	雰囲気		10	11.2	2.1
	施　設		5	9.0	1.1
	子どもの数		4	4.5	0.8
	小　計		186	209.0	39.8
その他	保護者との関係		6	6.7	1.3
	実習日誌の書き方		6	6.7	1.3
	連絡ノート		4	4.5	0.8
	小　計		14	15.7	3.0
	合　計		467	524.7	100.0

会話，絵画教室，ピアノなどが挙げられている。

幼児が自由に遊ぶ場面においても，遊びそのものは幼稚園も保育所も同じようであったが，保育所の方は異年齢交流が見られるという点，自由に遊ぶ場面においても保育室に必ず保育者が1名残っているのが保育所であり，幼稚園では，保育者が子どもたちのそばにいない場面が多く見られたというような記述もあった。保育所では子どもの安全面への配慮があったが，幼稚園では目の届かないこともあると考えたようである。実際には，幼稚園の教師たちは，担当クラスを越えて子どもたちを把握しており，連携をとりながら安全面への配慮や援助等を行っている。学生はそこまでの理解に至らなかったためにこのような結果となったものと思われる。また，学生たちは保育所実習を公立の保育園で行っており，統合保育なども行われている関係から，法令上の規定よりも保育士を加配しているため，3歳以上のクラスにおいても，1クラスを複数の保育者で担当しているところが多い。幼稚園では3歳児のクラスを複数で担当する場合もみられ，あるいは統合保育を実施している場合，障害児担当の教師を配置している場合もあるが，ほとんどは1クラス1名の担任で最大35名の幼児を指導しているというのが実態である。

主活動として捉えている部分では，2月ということもあり，文字や数の指導が行われており，これが幼稚園の特色であるというとらえ方をしている学生もみられた。また，行事が多く，それに向けての活動があり，そこが保育所との多いな違いであると感じている学生も多くみられた。行事が多いというのは，私立幼稚園の特徴として捉えられるものである。

保育の流れについては，幼稚園では，4時間前後の保育時間の中で，朝の会，昼食，帰りの会などで子どもの活動が区分され，それがメリハリにつながっているように感じている学生もいた。

そして，保育者の仕事内容についても，保育所では複数の保育者が子どもたちをみているが，幼稚園ではそれ以上の人数を一人の保育者が担当しなければならず，しかも短時間で活動しているということに少なからず驚きを感じたようであった。また，幼稚園では子どもたちが帰った後に，製作や壁面構成をしたり，と翌日の保育の準備をしているのに対して，保育所では，子どもたちの午睡時など短時間で準備をしている点ことなっていたとしている。半数以上の学生が記述していたのは，幼稚園では掃除が非常に多く行われているということであった。

学生の記述の仕方をみてみると，学生は幼稚園教育実習をそれ以前に行った保育所実習を基準としてその違いに着目することで，比較をしていることが明らかになった。つまり，学生の意識の中で，「保育所ではこうだった」ということを基準として「なのに幼稚園ではこうだ」と理解の仕方をしているのである。そして，保育所ではみられなかった事象について，大きな

インパクトを受けて意識化されているのである。

保育者として自分の子ども観なり保育観を樹立していくためには，実際の具体的な事象から抽象的な観念を成立させていくことが必要である。この点からすると，半数以上の学生が具体的な現象面からの記述になっていた点，今後の課題となるであろう。

(3) 初めての実習体験のインパクト

当初私たちが考えていたのは，実習ということで，学生が同じようなものであろうという予想のもとで，実習に臨んでいるため，いわゆる「実習馴れ」をしていて，幼稚園教育実習には緊張感などを感じずに臨んでいるため，成績が低下したのではないかということであった。

人が初めて何かをしなければならないことを考えると，そこには非常に大きなプレッシャーがかかることが考えられる。そのインパクトの強さは，同様の体験をするに従って弱まっていく，そのために学生にとっては4回目の実習である幼稚園教育実習では，学生が「また実習に行くんだ」というような感覚をもって，それまで2回経験している保育所実習と同様の姿勢で臨み，それが実際に実習を体験してみて，全く違うということに気付き，修復することが難しい学生が何とか実習だけは終了させるというような実習期間の過ごし方になっているのではないかと考る。実習が同じであるというとらえ方をしているということは，学生が保育実習の教育実習の担当者である私たちのところへ相談に来ることがあり，その際に私たちは幼稚園の教育実習の担当であり，保育実習に関しては担当の先生に相談に行くようにというようなことを話した際に，「同じ実習ではないか？」というような捉え方をしたいた学生が複数いたことからも伺える。

幼稚園教員養成のみを行っていた時代では，学生は教育実習に行く前の事前・事後の授業等で実習に対する不安感や期待感などを訴える学生が多く見られた。そして，初めの実習で体験した色々なことから，自分の内面や思考などに刺激を与えられ，その内容が学生個々に深く刻み込まれていた。これはいわゆる一種のショック体験として学生に意識化されていたのではないかと考える。

自分自身の学生時代を考えると，それはもうはるか昔のことでありながら，実習の中での指導教官からのアドバイスや，自分が保育をしている姿を今でも鮮やかに思い出すことができる。実際には3年次に附属幼稚園で3週間と4年次に都内の公立幼稚園で3週間の幼稚園教育実習があり，行く前はとにかく不安感だけで，子どもたちを借りて実地研究が行えるというような期待感だけはなかったということを覚えている。

以上のように，学生は同じ実習ということで，後から実施される幼稚園教育実習をそこにい

く前は軽くとらえていることも考えられ，保育所と幼稚園の保育内容に関する共通点と相違点については，実習演習の中で再確認することの必要性を感じる。

(4) 自分の体験から幼稚園，保育所を一般化する傾向

学生の記述で気になったことは，半数近くの学生が，自分が経験した保育現場での経験から，「保育所は○○だ」「幼稚園は○○だ」というようなステレオ・タイプの思考がみられた。「幼稚園は文字や数の勉強をするところだ」とか「保育所は遊ばせるだけで，教育はしていない」というようにです。極端な例をあげると，「先生，あそこの幼稚園は遊んでばかりで何も教育していないよ」というような短絡的な感想が寄せられることになる。これは極端な例であるが，幼稚園教育そのものについての理論的な理解がないままに，自分の経験そのものが全てであるかのような捉え方をしている学生も存在しているのである。

幼稚園，保育所を対比的にとらえ，それぞれの特徴を把握し，理解することは大切なことだが，それを短絡的に規定する傾向は，是正していくことが望まれる。本学においては，現在3回の保育実習が3年次までに行われ，その後3年次の6月と4年次の6月に2回の教育実習が実施されている。教育実習演習の教授内容の中に，今回の学生の捉えを再確認するような事を行うことが必要であると考える。

6. 幼稚園教員養成の今後の課題について

(1) 幼稚園教員をめぐる動きについて

幼稚園教員をめぐっては，文部科学省を中心にいくつかの新たな動きがみられる。1つには，文部科学省「幼稚園教員の資質向上について―自ら学ぶ幼稚園教員のために―」（平成14年6月24日　幼稚園教員の資質向上に関する調査研究者会議報告書）である。平成10年12月14日に告示され，平成12年度より施行された幼稚園教育要領では，幼稚園教員の役割について強調された記述内容となっている。それを受けて出された報告書である。

まず初めに幼稚園教員の資質向上の意義として述べられている中に次のような文章がある。

さらに幼稚園教員に求められる資質には，いわゆる「不易」と「流行」の部分があると考えられる。まず，いつの自体にも求められる，幼児を理解し，総合的な指導をするために必要な資質は「不易」として位置づけられ，常に原点に立って向上させていくべきものである。一方，現在，幼稚園を取り巻く環境が大きく変化する中，新たに幼稚園教員に求められるようになってきた資質は，「流行」と

して位置づけることができ，幅広い生活体験や社会体験を背景とした柔軟性やたくましさを基礎として向上させていくことが重要である。

基本的には，幼稚園教員の資質には「不易」と「流行」の側面があり，これらは共に幼稚園教員を続けている間，継続的に自己変革あるいは自己学習を続けていくことの必要性が説かれているのである。

そして幼稚園教員に求められる専門性として，以下のようにまとめている。

(1) 幼稚園教員としての資質

幼稚園教員は，幼児１人１人の内面を理解し，信頼関係を築きつつ，集団生活の中で発達に必要な経験を幼児自らが獲得していくことができるように環境を構成し，活動の場面に応じた適切な指導を行う力を持つことが重要である。また，家庭と地域社会との連続性を保ちつつ教育を展開する力なども求められている。その際，幼稚園教育が，小学校以降の生活や学習の基礎の育成につながることを配慮し，幼児期にふさわしい生活を通して，創造的な思考や主体的な生活態度などの基礎を培うことに留意する必要がある。言うまでもなく，これらの教育活動に携わるにあたっては，豊かな人間性を基礎に，使命感や情熱が求められる。

以下，幼稚園教員に求められる専門性のうち重要と考えられるものを示し，その資質を向上させる手がかりとする。

(2) 幼児理解・総合的に指導する力

(3) 具体的に保育を構想する力，実践力

(4) 得意分野の育成，教員集団の一員としての協働性

(5) 特別な教育的配慮を要する幼児に対応する力

(6) 小学校や保育所との連携を推進する力

(7) 保護者及び地域社会との関係を構築する力

(8) 園長など管理職が発揮するリーダーシップ

(9) 人権に対する理解

以上のことは，幼稚園教員として成長し続ける間の課題として挙げられているものである。そして，幼稚園教員の養成段階における課題と展望として，次のように述べている。

1　養成段階における課題と展望

(1) 養成段階における基本的視点

教員養成段階では，幼児の総合的な発達を促すため，幼児理解に基づき，遊びを通じて総合的に指導するという幼稚園教員の基盤的な専門性を養成することがまず取り組むべき重要なことである。その際，教員が具体的に保育を構想し実践する力の基盤を形成することが求められる。

そして「教員養成志望者自身の多様な体験・得意分野の素地の形成」「実践力の育成」「教員養成のための教育環境の充実」「上級免許状の取得，免許状及び資格の併有」「幅広い幼稚園教員志望者の確保」などのついて述べられている。

以上の項目の中で幼稚園教育実習で学生が習得するものとしては「実践力の育成」ということがある。

採用されて間もない教員の中には，実践力の基礎に欠ける者が散見される。在学中に幼稚園の現場を経験する機会が教育実習以外にほとんどなく，幼稚園教員という職業のイメージをつかみ，理論と実践とを結びつける機会や，教員志望者自身の豊かな生活体験が欠けている点が課題と考えられる。

養成機関においては，大学改革の一環などで，カリキュラムの検討や授業に関する評価制度を通じて，実践的な指導力に対するニーズへの対応の改善に努めることが重要である。そのためには，養成機関が，幼稚園との連携を強化し，幼稚園現場からのニーズをもとに，カリキュラムや授業の中で理論と実践を結びつけることや，学生に早い段階から，インターンシップなどにより幼稚園現場での実践を経験する機会を与えるなどの工夫をすることも重要である。

幼稚園教員を目指す学生にとって保育現場は自分自身の実践力や保育を構想する力などについて体験の中から学ぶことのできる貴重な体験である。その体験の中から自分自身の学習課題を見つけたり，自分自身の進路について考えたりする。幼稚園教育実習の中で，上記の幼稚園教員の資質向上のためにどのようなことができるのかを考えた場合，やはり１人１人の学生の学びをどのように把握し，保証していくのかということが問題となると思われる。

現在「教員免許更新制」についての検討が行われているが，幼稚園教員についても更新制が導入される。この中でも述べられているが，今後は教育実習にいく前の養成校の段階で実習に出せる学生を選別するというようなことも挙げられており，また，とりあえず免許，資格をとっておこうというような現在の免許取得のあり方についても，使わない免許はその効力を失わせるというようなことも検討されている。

一方で幼稚園と保育所は同じ年齢の子どもが通いながら，2元化されたままできているが，この10月からスタートした「認定こども園」などはその両者の機能を併有するような保育施設の構想であり，保育に関していえば規制緩和の方向が打ち出されてきている。

また，幼稚園の義務教育化や無償化などの動きもある。

また幼児教育振興プログラムが平成13年に策定され，本年度は幼児教育振興アクション・プログラムも検討されている。

以上のような保育界の動きに対応しうる教員を養成していく上で，考えなければならない課題は山積みされている。

(2) 個々の学生の学びをどのように保証していくのか

学生の記述内容からもわかるように，学生の学びは，個人差が大きく，現象面のみに目が向いてしまい，幼稚園はこうだ，保育園はこうだと，自分の体験からのみ規定してしまう学生もいる。一方，幼稚園保育所の違いを現象面からとらえ，それがどうして生じるのかを考察し，自分自身の学びについても関連づけて記述している学生もいる。実習はそれまで大学で学んできた理論的な内容や実践的な内容を実地で研究する場として位置づけられている。そのことが学生個々にどの程度達成されているのかについての把握が必要になってくると思われる。

現在，本学においては，50名ずつ2クラスで教育実習演習の授業を行っているが，その中で，学生個々の学びの実態や，今後学ばなければならないことについて，どのように指導していったらよいのかということが課題となってくる。

今回の調査結果から示唆を受けたこととして，先ず第1に学生の個性を把握する必要性があるということである。これは学生個々の得意分野の育成の素地を形成するという，文部科学省の「幼稚園教員の資質向上について」の報告書にも述べられていたこととも関係するが，学生1人ひとりの能力や技術面，内面的なものも含めて把握した上で，それぞれの学生の資質を伸ばすような工夫をしていくことが必要であるということである。

第2には，それぞれの実習の意義について学生に自覚化させ，それぞれが実習を単にその期間のみ過ごせばよいというような消極的な取り組みに終わることなく，自分自身の課題を持って取り組むというような学生の実習への姿勢を主体的に持つようなきっかけを与えることである。

第3には，保育の技術的な側面に着目した個々への指導の徹底がはかられる必要性もあるであろう。日頃の講義や演習の授業では目立たない学生や，自分の疑問や不安を表現することのない学生への対応をどのようにしていったらよいのかということも課題である。